デイサービス利用高齢者と家族によるサービスの評価

副田あけみ　　島村　隆太*　　新居　千秋**　　小林　結美

本稿は，東京都下にあるデイケア・センターにおいて，デイサービス利用者（高齢者および家族）にサービスの評価をしてもらった調査結果の一部を報告するものである。

Ⅰ　調査の意図と方法

1）意　　図

今日の在宅福祉サービスの３本柱のひとつであるデイサービスは，利用者である高齢者とその家族にとってどのような意味をもっているのか。実際にサービスをおこなっているスタッフの手によってサービスの評価研究をおこない，今後のサービス提供の充実に向けて活かしていきたいというのが，今回の調査の意図である。

デイサービスにかぎらずパーソナル・ソーシャルサービスの評価研究は今のところ乏しい。デイサービスの事業としての制度上の目的は明快なので，その目的がどのていど達成されているかを明らかにすることが評価研究の目標といってよい。デイサービスの設置運営要綱に明記されている目的は，①自立的生活の助長，②社会的孤立感の解消，③心身機能の維持向上，④家族の身体的・精神的負担の軽減である。だが，本事業を実施している各々のセンターは，地域やセンターの実状などからそれぞれ利用対象者やサービス内容，プログラム内容になんらかの差異をもつ。また，それぞれ上記の制度上の目的のどれに焦点を当てるか，あるいは実際のサービス提供にあたって，主要なねらいをどこに置くかといった点でなにがしかの違いをもっている。

今回，調査を企図した当ケアセンターでは，後に述べるように利用高齢者に痴呆性老人や歩行・移動に困難のある虚弱老人，障害老人が少なくない。また，家族と同居していても外出の機会が限られている人が多い。こうした実態を踏まえて，当センターではサービスの主要なねらいを，高齢者にかんしては，他者と交流することによって喜びや満足感を得ることに置いている。そして，副次的なねらいとして，結果的に生活にハリがでて日常生活場面での行動や態度に好ましい変化が生じることが望ましいと考えている。また，家族にかんしては，できるだけ接触し相談にのるなどして家族を精神的に支援することにねらいを置いている。そして，生活上でも介護者に好ましい変化が生じることが望ましいと考えている。

具体的にいえば，高齢者にかんしては，高齢者たちがセンターに来ているあいだ楽しい雰囲気のなかで過ごせるよう常に気を配り，スタッフが冗談をまじえた楽しい話かけをお

*　泉苑ケアセンター
**　泉苑ケアセンター

こなったり高齢者同士の交流を促進するよう働きかける，高齢者がより喜ぶ施設外活動を活発におこなうなどしている。だから，趣味活動やグループ活動として新しいものをどんどん取り上げるとか，体力保持・機能維持のための健康体操やリハビリテーションに力を入れる，作品をうまく完成させる，といったことにはそれほど重きを置いていない。家族についていえば，家族介護教室の他，家族懇談会を開催したり個別相談に随時応じている。電話での相談だけでなく家族に来所してもらって面接したり，家族からの電話で相談に応じるための家庭訪問もしている。

主要なねらいは以上のとおりであるが，高齢者の身体面，動作面でも注意を払っていることはいうまでもなく，健康チェックの他に靴や杖，車椅子などの道具にかんして，また，特定の動作における体の動かしかたなどについてのアドヴァイスもおこなっている。

以上のような当センターの目標は，どのていど達成されているか。

2）方　　法

サービス提供の目的，あるいはねらいがどのていど達成されているのかを評価するには，評価の指標と評価主体を決定しなければならない。当センターのねらいはまずは利用者が喜ぶこと，楽しむこと，そのことによって生活にハリがでて家庭での行動面，態度面で好ましい変化がでてくることであるから，高齢者に直接答えてもらうことが望ましいとまず考えられる。だが，実際には痴呆性老人も含まれるし，痴呆性老人でない人でもアンケート調査には多少抵抗がある人もいると考えられた。また，家庭での変化については，日頃お世話している家族に尋ねたほうが答えやすいと判断した。さらに，家族にとってセンターが在宅介護生活の支援となっているかどうかについては，家族に尋ねるしかない。そこで，今回は，家族にアンケートに答えるという形で評価してもらう方法（調査A）と，一部の高齢者に職員以外のメンバーが対話の形でセンターの活動について尋ねるという方法（調査B）とをとることにした。

家族に評価してもらう方法としては，サービスを直接利用している高齢者がサービスの提供に満足していると思えるかどうかと尋ね，そのうえで，家庭生活場面で行動や態度などにかんするいくつかの側面（表情・機嫌，動作，意欲，コミュニケーション）にかんして，この1年間にどのような変化がもたらされたと思うかと尋ねることにした。家族にとってデイサービスの利用が在宅介護生活の支援になっているかどうかを評価してもらうことにかんしては，デイサービスの利用が介護者にとってどのような意味をもっていると思うかと尋ねた。そして，この1年間に実際の介護者の生活や心理に望ましい変化が生じたかどうか（気分・負担感，時間的余裕，体調，悩み，情報の習得といった側面について）を尋ねた。

高齢者と家族がデイサービスの利用によって生活場面における好ましい変化がでるということを，デイサービスの効果として客観的にとらえようとするならば，定めた評価基準に従って調査メンバーが一定期間ごとに評価し，その数値の変化を求めてこれをサービスの効果とすべきであろう。今回は高齢者の家族がどのように評価しているかを問う方法をとっており，その意味で，今回の結果がデイサービスの利用高齢者と家族にたいする効果を表わしているとはいいがたい。だが，家族による評価を知ることによって，当センターのサービス提供が利用高齢者と家族にどのような影響をどのていどの割合の人々に与えた

のかにかんして示唆をうることができるとともに，より充実したサービス提供に向けて検討すべき課題をうることができると思われる。

デイサービス利用の影響は，高齢者にかんしても家族にかんしても劇的な形をとることは少なく，高齢者の変化も家族の変化もじょじょに起きるばあいが多い。その意味で，今回は家族が変化を把握しやすい側面として以下の項目を取り上げることにした。

高齢者	家族
顔つきや表情	日頃の気分
笑顔	介護の負担感
センターから帰ってきたときの機嫌	日頃の外出
歩行動作・移動動作	自分の時間
全体としての体の動き	日頃の体調
生活の規則性	介護や世話にかんする悩み
センターに来ない日の活動	介護方法にかんする知識
センターでの活動などにかんする家庭での対話	センターや老人ホームの理解
介護者にたいする文句やグチ	

今回の調査にかんして企画，実施したのは，副田，島村，新居であるが，一部の高齢者に直接ヒヤリングし，その結果をまとめたのは小林である。執筆にあたっては，ⅠからⅤまでを副田が，Ⅵを小林が担当した。

Ⅱ　センター利用高齢者と家族のプロフィール

当該センターは，東京都下のA市にある特別養護老人ホームに併設されているケアセンターである。A市には1990年度においても当該センターの他にはデイサービス・センターはない。当該センターはデイホーム事業と機能訓練，入浴サービス，ショートステイをおこなっている。1989年度においてはデイホーム事業と機能訓練の利用者50名にたいして8名のスタッフで対応していた。1990年度は定員が増加され，両サービスあわせて75名となった。また，1990年度は施設の改造のため，デイホーム事業の利用者と機能訓練の利用者とが合同でデイサービスを利用することになり，25名ずつ週2回通所している（これまでも午前中は両者合同の活動をおこなっていた）。

当該センターの利用者がどのような人々であるのか，そのプロフィールを紹介しておきたい。つぎのⅢからⅤまでは，1989年度のデイホーム事業利用者の家族を対象とした調査結果についてみていくので，その人々のプロフィールを記述するのが妥当であるが，あとに述べるようにこの調査の回答数は25と少なかった。そこで，ここでは当詳センターの利用者の特徴を知ってもらうために，1990年度の利用者のプロフィールを紹介しておく。

このプロフィールは，1990年3月，翌月からデイサービスを利用する高齢者の家族のかた（同居してお年寄りの介護や世話をおこなっている人に限定した）を対象として郵送法によるアンケート調査をおこなったその結果をもとに描いた（回答数は61）。

1）利用高齢者のプロフィール

まず性別内訳をみておくと，男性19.7％，女性80.3％で圧倒的に女性が多い。年齢は75～79歳がもっとも多く，平均年齢は77.9歳である。ＡＤＬ（日常生活動作能力）のうち，歩行は杖歩行などを含む「自立」が55.7％，「一部介助」が41％，「全介助」が3.3％であ

って，半数の人に介助が必要となっている。また意思疎通にかんしては，「普通」が75.4％，「やや難」が18.0％，「まったくできず」が6.6％である。医師から痴呆と診断され，かつ職員が記憶力・コミュニケーション能力・問題行動などから痴呆性老人と判断した人は全体の24.6％であった（昨年度からの継続利用者ではその30.3％，新規利用者ではその11.1％）。家族形態は「三世代同居」が54.1％，「二世代同居」が18.0％，「夫婦のみの世帯」が14.8％，「未婚の子との同居」が9.8％などとなっている。

センター利用の経緯は，「家族が広報で知って利用させたいと思った」が31.1％，「家族が知人から教えてもらって利用させたいと思った」が24.6％，「家族が役所で知って利用させたいと思った」が14.8％と，家族が情報を得て利用させたいと思ったケースが全体の70％を越えており，高齢者自身が情報を得てというケースは13％ていどであった。「その他」には，主治医や病院のケースワーカー，訪問看護婦，福祉公社のワーカー等に勧められたというケースである。家族はセンターの利用にたいして，「年寄りの身体もしくは精神機能の衰えを予防すること」を期待していた人が50.8％ともっとも多く，「年寄りが楽しみをもてるようになること」を期待していた人は34.4％であった。「週に２回でも世話してもらえるだけでよい」とした人は6.6％しかいないが，これはいずれも痴呆性老人をかかえる家族の回答である。家族からみると高齢者は，センター利用を「楽しみにしていた」という人が60.7％と多いが，「不安を感じていた」人も少なくない。

2）　家族のプロフィール

回答してくれた家族員は日頃利用者をお世話している人であるが，ここでは介護者とよぶ。この介護者の高齢者との続き柄は，「配偶者」が34.4％，「娘」が32.8％とほぼ同率で，「嫁」が24.6％となっている。健康状態については，「健康」という人が54.1％のみで，「調子がすぐれない」が29.5％，「病気がち」が4.9％いる。自分の病気の治療のため，あるいは薬を処方してもらうために病院に通っている人が47.5％と半数近くいる。一日の介護や身の回りの世話の時間は「とくに必要がない」とする人が34.4％いる一方，「昼夜をとおして」という人が23.0％いる。

高齢者の別居子が援助をおこなっているとした回答は全体の52.5％で，そのうちの援助内容としては，「なにかあったときの手助け」（援助あるとした回答の86.2％）や「話相手」（55.2％）が主なもので，「日頃の介護」（24.1％）や「金銭的援助」（17.2％），「家事の手伝い」（10.3％）は割合が低い。もっとも近くに住んでいる別居子の訪問頻度は「年に数回」が21.3％ともっとも多く，「毎日」から「週１回」までを合計しても16％ていどにすぎない。高齢者の別居子宅への訪問頻度はもっと低くなっている。

以上からわかるように，利用者のほとんどが虚弱・障害老人で，生活していくうえでの基本動作である歩行にかんして介助を要する人が半数，痴呆性老人と判断される人が４分の１と，直接の介護や監護を必要とする人々が少なくない。介護者の７割弱は高齢の配偶者や娘であって，健康状態も「健康」と答えられる人は半数しかおらず，家庭での介護が種々の負担をかかえながらおこなわれていることが想像できる。

Ⅲ　デイサービスの評価1

以上のように，当該センターではこうした虚弱・障害老人，痴呆性老人にたいしてデイサービスを提供している。以下Ⅲ～Ⅴでは，1989年度の利用者の家族で調査Aに回答してくれた人の結果を報告する。一部の高齢者に直接ヒヤリングした調査Bの結果についてはⅥで報告したい。

1）調査対象

1990年3月におこなった調査Aは，1989年度のデイホーム利用者（35名）のうち1989年3月の家族調査（基本事項調査）に回答してくれた介護者を対象としておこなったので，回答数は25と少なかった。

この25ケースの高齢者のプロフィールをみておくと，男性32.0%，女性68.0%，平均年齢78.3歳，ＡＤＬのうち歩行は「自立」が80.0%，意思疎通は「普通」が72.0%で，痴呆性老人が48.0%である。先にみた調査の結果（つまり1990年度の利用者）にくらべると，男性が12.3%ほど多く，平均年齢は0.4歳ほど高い。また，痴呆性老人が多い。ＡＤＬは歩行でみると「自立」者が22%ほど多いが，意思疎通が「普通」にできる人は27.4%ほど少ない。この2つの結果は，痴呆性老人が相対的に多いためである。

今回は回答数が少ないことと，痴呆性老人が約半数いることから，回答を痴呆性老人のグループ（以下ではＤＧを記述）と非痴呆性老人のグループ（ＮＤＧと記述）に分けて両者を比較する形で記述することにしたい。どの人がＤＧに入るかの判定は，主治医の診断結果に加えて，スタッフが主として意思疎通と問題行動面から痴呆性老人に必要とされる見守りや特別の配慮を必要とする人という判断によっておこなった。

ＤＧは男性4名，女性7名の11名，ＮＤＧは男性4名，女性10名の14名である。

2）高齢者の変化にかんする評価

介護者からみて高齢者はセンターでの活動に満足していると思うかと尋ねたところ，「大変満足していると思う」がＤＧで72.7%，ＮＤＧで92.9%であった。「まあまあ満足していると思う」の割合をあわせると，両グループとも100%近くになる。センターにかんして高齢者は満足しているとほとんどの家族が評価している。ただし，満足度が高いと評価する人はＮＤＧのほうにやや多いようだ。センターでの活動にたいする高齢者の満足度は大変高いと家族が指摘しているということによって，当センターの主要のねらいのひとつはかなり達成されていると考えてよいだろう。

つぎに，センターを利用したこの1年の間で，お年寄りに変化がみられたかどうかを先述した項目にかんして評価してもらったところ，結果は図1のようになった。

変化にかんしてプラスの評価が比較的多かったのは，顔つきや表情が以前よりよくなったとか笑顔が以前より多くなった，センターから帰ってきたときの機嫌が以前よりよいことが多いといった心理的側面を表わすと考えられる項目である。高齢者がセンターに来ること，人々と交流すること，活動をすることに満足していることが，こうした家庭での高齢者の表情や態度に変化をもたらしたと解釈したい。ただし，こうした変化が家庭でみら

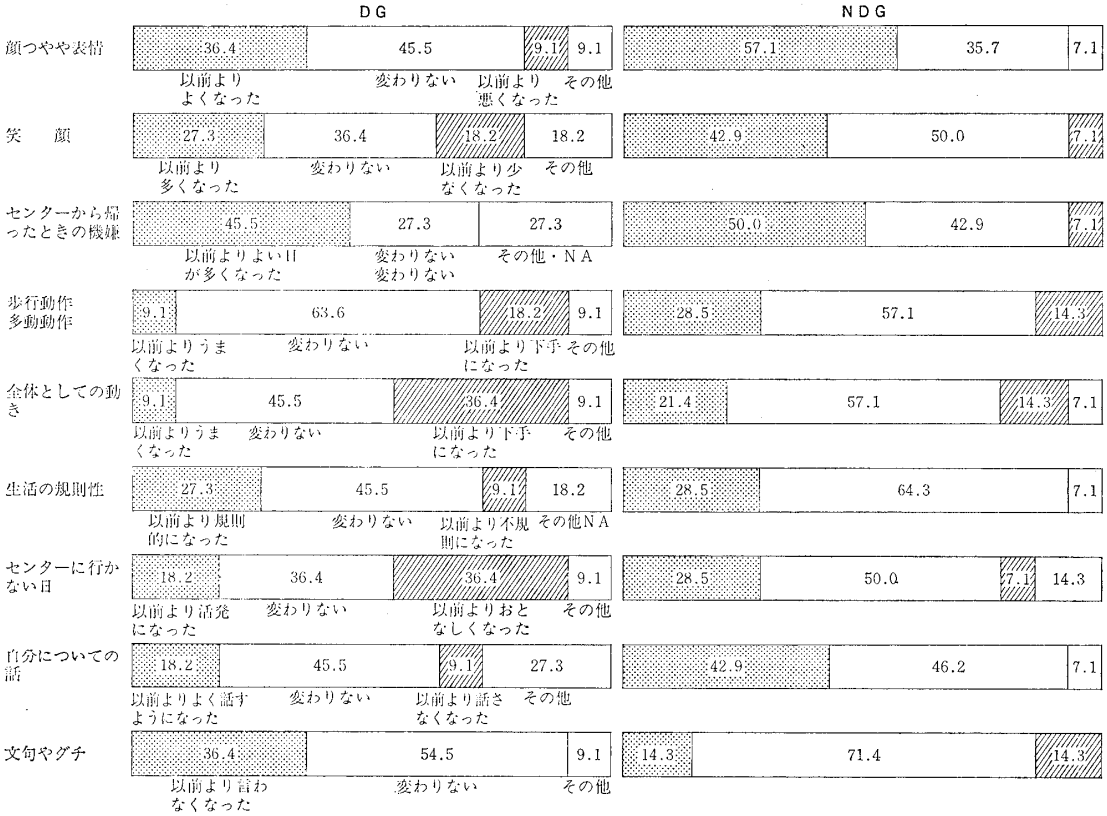

図1　この1年間にみられた老人の変化（%）

れたとしているのは，DG，NDGとも半数を越えるか越えないていどである。顔つきや表情が「以前よりよくなった」DG36.6%，NDG57.1%，笑顔が「以前より多くなった」DG27.3%，NDG42.9%，センターから帰ったときの「機嫌が以前よりよいことが多い」DG45.5%，NDG50.0%。いずれもDGのほうの割合が低い。痴呆性老人のなかにはセンターでの活動に満足しているらしいが，その満足感が家庭におけるよい表情や機嫌のよさにつながらない人が多いということなのであろう。

つぎに比較的多く評価されたのは，家庭での高齢者と介護者とのコミュニケーションにかんする項目である。NDGでは自分のことやセンターでの話など「以前よりよく話すようになった」という選択肢が42.9%と多く選ばれている。DGではこの選択肢の割合は18.2%とあまり多くない。その代わり，文句や小言，グチなどを「以前より言わなくなった」という選択肢が比較的多く選択されている（36.4%）。デイサービスの利用が，非痴呆性老人にとっては家庭でのコミュニケーション頻度をふやしたり内容を豊かにするといった影響を，痴呆性老人にとっては不満を表現する対話を減少させるという影響をもたらしているようだ。

そのつぎは意欲にかんする項目である。家庭での生活が「以前より規則的になった」という選択肢が，DG，NDGともに28%ていど選択されている。また，NDGではセンターに通所しない日の生活が「以前より活発になった」という選択肢がやはり28.5%あげられている。DGでも18.2%あるが，「以前よりおとなしくなった」というものも36.4%ある。アンケート用紙の欄外に，「センターに行くことで満足して以前よりおとなしくなった」という記述がいくつかみられたところから，この「以前よりおとなしくなった」とい

うケースのなかには介護者がプラスの変化として選択したケースが含まれていると判断できる。デイサービスの利用によって一部の痴呆性老人や非痴呆性老人は，以前より規則的な生活を送れるようになった。そして非痴呆性老人にとっては積極的な生活態度も生まれるという変化がみられるということである。

動作の変化については，プラスの変化がみられたという評価は少ない。家庭においてお年寄りの歩行動作や移動動作が以前よりうまくなったという評価は，NDGでは28.5%あるが，DGでは9.1%のみである。全体としての体の動かしかたが「以前よりうまくなった」のはNDGで21.4%，DGで9.1%である。しかし，DG，NDGの老人ともに個人差はあるにしても一般的にいえば身体的機能はじょじょに低下していき，体の動きもにぶくなっていく傾向にあるから，少数ながらも家庭生活場面での動作にかんしてプラスの変化がみられたと家族が評価している点は注目してよいのではないか。また，同じ理由から，DG，NDGともに半数以上が「以前と変りない」と評価していることは，家庭生活上の機能低下の予防という面でデイサービスの利用がなんらかの影響を与えていると解釈してもよいのではなかろうか。

デイサービスの利用によって家庭生活での高齢者の態度や行動面にプラスの変化がみられたという割合は項目によって，またDGとNDGによって差がある。そこで，回答者ごとに9つの項目のうちプラスの評価をいくつしているか，その数をだしてみた。

すると，DGでは，プラスの変化はひとつもなかったという回答は0で，1ないし2あったという回答が70%（NAを除く割合），3ないし4あったという回答が20%，そして9つという最高の数が10%であった。NDGでは0が35.7%，1ないし2が7.1%，3ないし4が21.4%，5から9までが35.7%である（表1）。痴呆性老人ではどの家族も少なくとも1つはプラスの変化があったと答えているが，そのうちの大部分は1つか2つの変化の指摘で，5以上の変化つまり生活面でかなりの変化がみられたと評価したのはわずかである。これにたいして，非痴呆性老人では，以前と変わらずとくにプラスに変化したとは見えないという人の割合と，かなりの変化が見られたという人の割合が4割弱と同じていどである。

当センターの副次的なねらいである高齢者の家庭生活上での好ましい変化は，非痴呆性老人の3分の1強にはみられないが，その他の人々にはなんらかのていどみられる。副次的なねらいもあるていど達成されていると理解しておきたい。

表1　プラスの評価の数（高齢者）

項目数	DG		NDG	
0	0人	0 %	5人	35.7%
1 2	5 2	70.0	1 0	7.1
3 4	1 1	20.0	1 2	21.4
5 6 7 8 9	0 0 0 0 1	10.0	1 2 1 1 0	35.7
NA	1		0	

注：DG・NA・1ケース含まれるのは入院中により評価しなかったためである。比率はNAを除いて計算した。

Ⅳ　デイサービスの評価2

1）介護者の特徴

25人の高齢者の家族形態は，子ども家族との同居世帯が多く，子ども家族との「二世代

同居世帯」と「三世代同居世帯」とで全体の80.0%になる。「老人夫婦世帯」は4.0%，「未婚の子どもとの同居世帯」は12.0%であった。これらの高齢者を世話・介護している介護者の続き柄は，娘と嫁が40.0%ずつ，妻が12.0%，夫，義理の息子がそれぞれ4.0%ずつであった。また，介護者の年齢は50代が40.0%で，30代40代がそれぞれ24.0%，就労している人が56%と半数強おり，そのうちの半数はフルタイムで働いている。

お年寄りの日常生活動作にかんする介護のていどは，痴呆性老人をかかえるDGは一日「1～2時間ていど」54.5%，「半日ていど」と「昼夜をとおして」が9.1%ずつであるが，非痴呆性老人をみているNDGでは介護は「とくに必要がない」が71.4%と多かった。着替えや入浴，排泄などの世話・介護をしている項目数は，DGでひとりあたり2.6，NDGでは1.4であるが，整髪や衣類の整理，食事の準備，居室の掃除などの身の回りの世話にかんしては，DGで4.3，NDGで2.3と多くなる。いずれにしても，NDGよりDGのほうがお年寄りの介護や身の回りの世話にかんして，多くの時間と労力を費やしている。そのためであろう，DGには体の「調子がすぐれない」人が45.5%，「病気がち」の人が9.1%と，半数以上が健康状態がすぐれないと答えている。NDGでは「調子がすぐれない」人が28.6%ていどである。

2） 介護者自身の変化にかんする評価

介護者にとってデイセンター利用はどのような意味をもっていると思うかと複数回答を許して尋ねたところ，「精神的負担が減る」がDGで72.7%，NDGで57.1%，「いざというとき相談できて心強い」がDGで72.7%，NDGで71.4%と，このふたつの回答がもっとも多かった。この他には「年寄りと離れて気分転換ができる」DGで54.5%，NDGで28.6%，「肉体的負担が減る」DGで63.6%，NDGで7.1%，「その他」DG18.2%，NDG14.3%などである。デイセンターの利用によって精神的負担が減るとかいざというとき相談できて心強いという評価が多いことは，虚弱・障害老人，痴呆性老人をかかえる人々は自分たちにとって精神的な支えになるという点でデイセンターをもっとも評価しているということであろう。この意味で，当センターの家族を精神的に支援するという主要なねらいは，かなり達成されているとみてよいのではないか。

では，センターの利用は実際の介護者の生活場面にどのような変化をもたらしたのだろうか。介護者自身の変化にかんして評してもらった結果は図2のようになった。

プラスの変化があったともっとも多くの人から評価されたのは，介護や世話の方法にかんする知識，センターや老人ホームについての理解といった情報の習得という側面であった。介護や世話にかんする知識が「以前より多くなった」はDGで72.7%，NDGでも42.9%が回答している。センターや老人ホームについて「以前より理解できるようになった」は，DGで81.8%，NDGで57.1%いる。DGのほうに多いのは，かれらのほうが痴呆性老人をかかえて日頃から介護に携わることが多く，介護にかんする適切な知識や施設にかんする知識を習得するニードがより強かったためであろう。こうした知識や理解の習得はていどに差はあるにせよ，痴呆性老人だけでなく非痴呆性老人をかかえる介護者の不安感もやわらげるのに役立っていると考えられ，この点もいざというときに安心という意味での支えにつながったと思われる。

つぎに多いプラスの評価は，気分や負担感など精神面の変化についてである。「以前よ

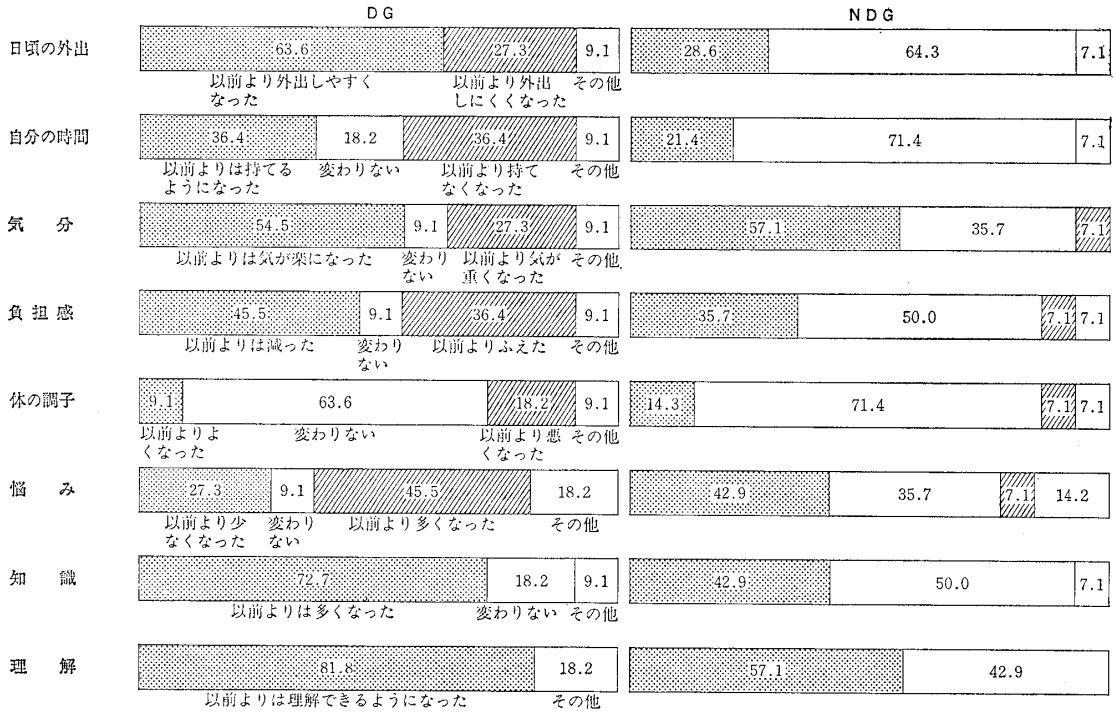

図2　介護者のこの1年間の変化（%）

り気が楽になった」という回答はDGで54.5%，NDGで57.1%，介護や世話の負担感が「以前よりは減った」という回答はDGで45.5%，NDGで35.7%である。以前より気が楽になったとか介護や世話の負担感が以前よりは減ったと実感できたのは，介護やサービスについてあるていど知ることができた，なにかあれば相談すればよい，といった気持ちをもてるようになれたからであろう。

介護や世話にかんする悩みが「以前より減った」という人は，NDGでは42.9%いたが，DGでは27.3%である。DGでは以前より気が楽になった，以前より負担感が減ったという人が半数近くいたのに，悩みそれ自体が減ったという割合は低い。逆に，DGでは悩みが「以前よりふえた」という人が45.5%と半数近くいる。これは，この1年間においても痴呆症状が進行して家庭での介護にあらたな困難が加わったケースがあるからと判断できる。

介護や世話にかんする悩みについて，1年前の時点での家族調査で尋ねた質問と同じ質問をこの調査でもおこない，それらを比較してみた。1年前と比べると，DGでは「体が疲れる」が27.3%から9.1%に，「イライラすることが多い」が72.7%から54.5%に「家族への気配りが減った」が27.3%から9.1%に「老人の健康のことを考えると不安」が63.6%から27.3%に減少している。だが，「気持ちがふさぎこみがち」は18.2%から45.5%に，「友人とのつきあいが十分できない」が45.5%から72.7%に増加している。他方，NDGでは「体が疲れる」が35.7%から0%に，「睡眠不足になりがち」が21.4%から7.1%に，「自分の時間がない」が35.7%から14.3%に「老人の健康のことを考えると不安」が50.0%から35.7%に減少しており，目立って増加した項目はない。

ひとりあたりの悩みの数でみると，NDGでは2.7から1.7個に減少しているのにたいし，DGでは3.7個から3.3個に減少したのみである。この2時点間の比較でみても，ND

Gでは全体として悩みが減少した人の割合が高いのにたいし，DGでは減少した人もいるが増加した人もおり全体としては減少の割合が低いという結果になっている。痴呆性老人をかかえる介護者には種々の介護や世話にかんする悩みをもつ人，また老人の症状の進行に伴い悩みがふえていく人が多いために，よけいにデイセンターの利用によって気が楽になるとか精神的負担が減るというプラスの評価をする人が多いのではないか。

時間的な余裕という側面でも，DGのほうがNDGより評価する人が多かった。日頃の外出にかんして「以前より出やすくなった」という人はDGで63.6%，NDGで28.6%，自分の時間が「以前よりは多くもてるようになった」という人はDGで36.4%，NDGで21.4%いた。DGのほうにこの割合が多いのは，DGのほうが介護や世話にかんして時間的拘束を強くうけていたため，週2回のセンター利用日によって時間の余裕ができた人，あるいはできたという感じをもてた人が多かったからであろう。多少なりともできた時間の余裕は精神的余裕をもたらすと思われる。時間的余裕が多少なりとももたらされたということも，センター利用の意味として介護者が精神的な負担の減少を評価したことに関係していると思われる。

もっともプラスの変化の指摘が少なかったのは体調にかんする項目である。週2回日中の老人の介護や世話を代替してもらって時間的余裕は多少もてるものの，体調がよくなるほど介護を代替してもらっているわけではないということであろう。体調が「以前よりよくなった」というのは，DGで9.1%，NDGで14.3%のみであった。センター利用の意味を尋ねたさいに，DGでは「肉体的負担多少が減る」と答えた人が64%いたけれども，精神的負担が多少は減ったと思うが体調を回復させるほどではないということであろう。

表2　プラスの評価の数（介護者自身）

項目数	DG		NDG	
0	0人	0　%	3人	21.4%
1 2	1 2	30.0	3 1	28.6
3 4	1 1	20.0	2 1	21.4
5 6 7 8	0 4 1 0	50.0	1 0 2 1	28.6
NA	1		0	

以上，プラスの変化を中心にみてきたが，項目によってその割合に差があるし，DGとNDGでも違いがみられる。そこで，各人がプラスの評価をいくつしているかその数をだしてみた（表2）。DGではプラスの変化がまったくなかった0という人はひとりもいない。1ないし2変化があったという人は30.0%，3ないし4あったという人は20.0%，5以上あったという人は50.0%であった。NDGでは0が21.4%，1ないし2が28.6%，3ないし4が21.4%，5以上が28.6%である。つまり，痴呆性老人をかかえる介護者のばあい，すべての人がデイセンターの利用によってなんらかのプラスの変化があったと評価しており，とくに5つ以上とかなりの変化があったという人が2分の1と多くなっている。他方，非痴呆性老人のばあいプラスの変化はとくになかったという人が5分の1おり，変化があったという人でも5つ以上のかなりの変化があったという人は4分の1強にとどまっている。デイセンターの利用が介護者の生活に与えた影響としては，痴呆性老人をかかえる介護者のほうがプラスの変化があったとより強く評価する傾向がみられたわけである。介護者の生活上の好ま

しい変化をもたらすという副次的なねらいは，痴呆性老人を抱える介護者の方で相対的に多く達成されていると考えられる。

4）介護意識と介護意欲

調査では介護者の介護意識や介護意欲にかんしても尋ねたので，その結果の概要を記述しておきたい。

日頃の介護者の気持ちを尋ねた結果では，ＤＧでは「世話の仕方はこれで十分とは思わないがこれ以上はできない」が一番目に多く55％，ついで「世話をするのはあたりまえ」が46％であった。ＮＤＧではこの順序が逆になり，「あたりまえ」が64％，「これ以上はできない」が21％である。やはり，痴呆性老人をかかえる介護者のほうに介護における限界を感じながらなんとかやってきている人の多いことがわかる。

今後も介護を継続していけると思うかと介護意欲を尋ねたところ，ＤＧ，ＮＤＧともに「なんとか続けていける」と答えた人が55％，64％と半数を越えた。しかし，ＤＧには「続けていくことはむずかしい」と困難を感じている人が27％と３割近くいる。

老人ホームや老人病院の入所などにかんして尋ねたところ，ＤＧには「これまでに考えたことがある」人が46％，「この先あるかもしれない」人が27％，ＮＤＧでは「これまでに考えたことがある」人が７％，「この先あるかもしれない」人が57％いた。やはり，介護での悩みを多くかかえている痴呆性老人をかかえる家族のほうに老人ホーム利用指向が高い。ＮＤＧは相対的に困難や悩みが少なく，センターを利用したこの１年間で悩みが減少している人が少なくない。それにもかかわらず，将来老人ホームや老人病院を利用する可能性を指摘する人が意外に多いのは，施設にかんする知識や理解が深まったというセンター利用効果のひとつの結果とも考えられる。

この先あるかもしれないと答えた人々が，将来かならず老人ホームや老人病院を利用するとは限らないが，デイサービスやショートステイの利用によって老人ホームのことをあるていど理解し，在宅介護がいよいよ困難となった段階で利用することになるならば，デイケアセンターの利用は，できる限り施設入所を延期するといった社会的効果を果たしていることになる。とくに現在，在宅介護での肉体的負担，精神的負担が相当重い状態であるにもかかわらず，痴呆性老人を在宅で介護し続けている家族がいるのは，たとえ週２回であってもセンターを利用していることが，精神的な支えになっているからではないか。

調査ではセンター職員にたいする評価もおこなってもらっているが，とくに痴呆性老人をかかえている家族では，職員の話やすさ，相談のしやすさ，利用者にたいする個別ケアにかんして80％から90％の人々が肯定的に高く評価している（図３）。また，現在職員に相談したいとか，今後相談したいと強く願っている人も痴呆性老人をかかえる介護者に相対的に多い。実際センターの職員が個別相談に応じているのもこうした家族に多い。このような職員との接触・交流が介護者の精神的な支えになっている面が強いと考えられる。

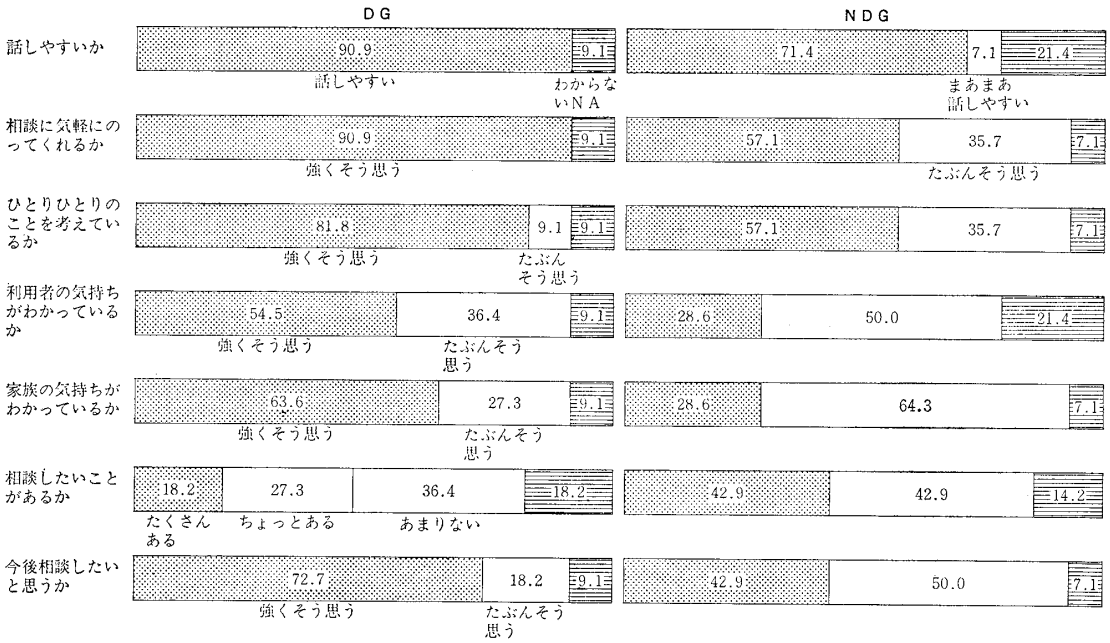

図3　職員にたいする評価（%）

Ⅴ　まとめと考察

1.　ほとんどの介護者は，高齢者がデイサービスの利用に満足していると評価している。とくに満足度が高いと評価しているのは非痴呆性老人をかかえる介護者のほうに多い。こうした満足感は，家庭生活での表情のよさやコミュニケーションの活発化，生活の規則性，積極的な生活態度などの好ましい変化をもたらしているようである。だが，その変化の表われかたは一様ではないようだ。痴呆性老人のばあい，すべての人になんらかのプラスの変化が表われたと評価しているが，その変化の数は1つか2つと少なく，多くの面で変化が表われたと指摘した人はわずかである。非痴呆性老人のばあいはとくに家庭生活で変化が見られなかったと評価された人も少なくないが，多くの面で変化が見られたとされた人もまた少なくなかった。当センターの高齢者にたいするサービスの主要なねらいや，家庭生活上好ましい変化をもたらすという副次的なねらいも一応達成されているとみなせよう。

2.　介護者はデイサービスの利用を，介護生活の精神的な支えという意味で高く評価している。これはどちらかといえば痴呆性老人をかかえる家族のほうでより高く評価されている。この高い評価は，介護生活において介護者自身に種々の変化がもたらされた結果によるところが大きいと想像される。プラスの変化としては介護・世話あるいはサービスにかんする知識の習得・理解，気分や負担感の減少，時間的余裕があげられるが，これもまた，一様に表われているわけではないようだ。痴呆性老人をかかえる介護者のばあい，すべての介護者がなんらかのプラスの変化があったと答えている。また，かなりの数の変化があったと答えている人が多い。他方，非痴呆性老人をかかえている介護者のばあい，変化はなかったという人が少なからずおり，変化があったという人でもかなりの数の変化があったという人は少ない。家族にたいする精神的な支えというデイサービスの主要なねら

いはかなり達成されているとみなせ，生活上の変化という副次的なねらいにかんしては，痴呆性老人を抱える家族について，相対的に多く達成されていると一応考えられる。

3.　以上のことから，デイサービスの利用が家庭生活における態度や行動面に及ぼす影響としては，痴呆性老人には少ないながらもすべての人になんらかのプラスの影響を与えること，そして，その家族にはかなりのていどのプラスの影響を与える傾向があることが示唆されたといえよう。このことは，痴呆性老人と痴呆性老人をかかえる家族にたいするデイサービスの意義の大きさを示すもので，痴呆性老人とその家族にたいするデイサービスの提供をいっそう推進する必要性をあらためて認識させられる。

4.　非痴呆性老人には特に日常生活面でのプラスの影響を与えないばあいもあるが，かなりのていどの影響をあたえるばあいも少なくない。また，その家族についてもとくに影響を与えないばあいもあるが，あるていど以上の影響を与えることも少なからずある。こうしたことを考慮するならば，個々の高齢者とその家族の生活状況をよく理解し，必要な人にどのようにサービス提供の援助をしていくのが望ましいのか検討しながら，サービス提供していく必要があると思われる。

5.　痴呆性老人のばあいでも非痴呆性老人のばあいでも，日々のデイサービスの利用に満足してもらうだけでなく，多少なりともあるいは短期間であっても家庭生活でプラスの変化がみられるように，また，家族が介護生活で多少なりとも好ましい変化を得てデイサービス利用を精神的な支えと感じ，できるだけ長く介護生活を維持していけるようにするためには，利用開始期からのケースマネジメントをやっていく必要がある。高齢者と家族の生活状況のアセスメント，個々のケアプランの作成，サービス提供やサービスの調整，適宜のカウンセリング，アドヴァイス，リアセスメントといった一連のケースマネジメントである。これは，心身の変化が相対的に早く介護や世話にかんする悩みや不安をより多くもたらしがちな痴呆性老人とその家族にたいしてより必要であろう。だが，非痴呆性老人でも虚弱・障害老人たちであるから，心身の状態の変化にかんして不安や悩みは高齢者本人においてもまた家族においても大きい。やはり，ケースマジメントの必要性はあると思われる。

Ⅵ　高齢者によるデイサービスの評価

調査Ｂは，利用者自身にデイサービスにかんしていくつかの質問を調査者が直接おこなったものである。調査期間は1990年１月から２月。調査の対象者は，調査Ａの対象となった利用者のなかからヒヤリング調査の可能なもの，すなわちＮＤＧと，ＤＧのなかでも痴呆症状が軽度でコミュニケーションが可能な者計18名，内訳は男性３名，女性15名である。年齢は66歳～91歳であるが，15名は75歳以上である。ヒヤリング調査においては，調査者との関係が回答におよぼす影響が強いことが考えられる。そのため調査者は，調査の準備として利用者と同じ立場で数回デイサービスに参加し活動を共にした後に，活動中および昼食時間，休憩時間を利用し調査をおこなった。質問の内容はおよそ次のとおりである。

1.　センターを利用したきっかけと，初めて利用したときの気持
2.　利用してからの生活の変化と，非利用日の過ごしかた
3.　センターでの楽しみ・特に楽しかったこと

4.　今後センターでやってみたいこと・希望
5.　センターで知りあった仲間との付き合い方
6.　現在の利用回数は適当かどうか
7.　職員に対する意見・希望

調査対象者の数が少ないこと，ヒヤリング調査であることから，できるかぎり利用者の自然な声を重視する方向でまとめてみる。

センター利用の経緯は，「家族の勧め」でと答えたものと，「広報を見て・友人の勧めで自分で申し込んだ」と答えているものが半数ずつである。対象となった利用者には一人暮しの者が4名含まれているが，一人暮しの老人は「大勢の人が集まるところへ行きたかった」，「同年代の人と話がしたかった」，「友人をつくりたくて」，というように積極的にセンターの利用を考えている。一方同居している家族から勧められた際には「初めはいやだといっていた」，「気が進まなかった」というように断わったり，消極的な態度を見せていた者も多く，理由としては「人前に出るのがいや」，「知らない人とうまくやっていけない」などがある。初めて利用するときには，自分で申し込んだ者も含めて半数が「うまくやっていけるか心配」，「不安だった」と答えており，家族からみた回答を裏付けている。

センターを利用するようになってからの生活の変化については，3分の1が「規則正しい生活をするようになった」と答えている。具体的には「洗濯や掃除を，計画的に片付ける」「通院の日を決めた」「朝，早起きをする」などである。また「前日からワクワクしている」「前の日は興奮する」という声も聞かれた。「センターに来るために外出できる」と答えたものが半数近くおり，「それ以外で外出することはほとんどなく」，センターの利用日以外の日は「家事をかたづける」「家事を手伝う」と，「一日中テレビを見て過ごす」か「たまに近所の散歩」という答えが大部分である。

利用の楽しみは「同年代の人とおしゃべりできること」という答えがある反面，「しゃべらなくても楽しんでいる」，「雰囲気が良いので楽しい」という者もある。具体的に特に楽しかったことで，バスを使用する園外活動をあげたものが多く，「行ったことのないところへ行け，新しい体験ができる」「行き帰りが安心で，必要なとき助けてもらえる」「大勢ででかけ，皆で食事ができる」などを理由としてあげている。

現在当該センターでおこなわれている，千代紙を用いた手工芸，藤工芸，銅版細工などには，全員ほぼ満足しており「形として残るのがうれしい」，「持って帰って家人に見せられる」，「孫のために作ってやれるのでやりがいがある」と答えている。

午前中におこなっている体操をあげて，「杖無しで歩けるようになった」，「以前より歩けるようになった」，「身体を動かす機会として良いリハビリになっている」という声もあり，これらは身体面にプラスの変化がみられた例といえる。

これからやってみたいこと，希望，などの問には積極的な回答が少なく，2名が「陶芸などやってみたい」と答えたほかは，「特にない」「自分では何をしてよいのか解らない」「今のままで満足」「考えたことがなかった」などで，「職員の人から，『これなんかどう』とか『～しましょう』と言ってくれたほうがいい。私達の時代，特に女性は自分から進んで何かしようとは考えて生きてこなかったから」，「どんどん新しいことをやってみたいという気持は，私達には少ないと思う。『やってみようか』と言われてできそうならやってみるという感じ」というのが正直な意見のようである。

全員でおこなっている体操について，「もう少し体操に力を入れてほしい」「立ったり，歩いたり，運動という形でやりたい」という意見がでていたが，いずれも「一人で歩けない人や，身体の不自由な人もいるから難しいと思う…」という意味の言葉が続いていた。

センターを利用して知り合った仲間との付き合いかたにかんする問いには，半数以上が「電話で話をする」「家が近い人とは時々行き来をしている」など何らかの形で，センター以外でも付き合いがあると答えているが，「特に親しくしている人はいない」と答えた6名には男性3名が含まれ，「ここは女性が多いから…」「男は口がうまくないから…」と答えている。

当該センターの利用日，週2日は適当かどうか，に対して10名が「2回がちょうど良い」「2回というペースが生活の一部になっている」と答えているが，「祝日などで週1回になったときはさびしい，がっかりする」と付け加えている者が3名ある。他は2回以上あってもよいという意見で「3回くらいはあってもよい」「もっとあってもよい」「毎日あってもよい」各2名ずつである。

最後に職員に対する希望・意見を聞いた。「皆に公平で親切」「思いやりがある」「やさしい」「めんどうみがよい」「安心して過ごせる」「気持ちよく過ごせるのは職員皆さんのおかげです」と全員が職員に感謝し，頼りにしている様子がうかがわれる。また「若い人が，はつらつと働く姿を見ると気持ちよい」「もう少しお化粧などして明るくしてもよいのでは」というように，見る対象となっている面もある。希望することとして「少し親切すぎる」「甘過ぎると感じる時がある」「もう少し見ていてほしいなあと思うことがある」という意見や，「指示をしてもらわないと動けないから，どんどんリードしてほしい」「手芸などの指導をしてくれる人がもう少しいてほしい」などがだされた。

そえだ　あけみ（社会福祉学）
しまむら　りゅうた（社会福祉学）
あらい　ちあき（社会福祉学）
こばやし　ゆみ（看　護　学）